

## 2) FD 研修会

### 【第1回 FD 研修会：7月16日（木）】

・参加者数 11 名

#### 1) 平成 26 年度における「学生による授業評価」、「教員による授業点検シート」、「教員相互の授業参観」について

・講師・報告者：教育学部長福田亘博

【概要】本学部の FD 活動の中で、「授業改善の取り組み」として重要な役割を果たしている「学生による授業評価」、「教員による授業点検シート」、「教員相互の授業参観」について、平成 26 年度学部開設最初の年度でそれぞれについて確実に実施し、評価したことが説明された。各教員の授業は学生による授業評価及び教員相互の授業参観で高い評価を得ており、改善点はほとんどないことが説明された。これらのことは、FD 報告書として本学ホームページ FD/SD 活動にアップされたことが紹介された。また、平成 27 年度においても同様の取り組みを推進することが確認された。

#### 2) 平成 26 年度ベストティーチャ賞受賞者による「モデル授業」

・講師・報告者：教育学部准教授片野郁子

概要：本報告では、平成 26 年度本学部ベストティーチャー賞受賞に際し、基礎的な音楽能力の差が大きい音楽分野の関係科目の指導について、授業方法、工夫した点などの実施報告がなされた。実際に、初心者の音楽能力は格段に進歩したが、学生の積極的な学ぶ姿勢があつての授業評価であつたとの感想が述べられた。

### 【第2回 FD 研修会：9月17日（木）】

・参加者 11 名

・講師・報告者：教育学部長福田亘博

#### 1) 「学生の学力向上を目指して」：「ルーブリックによる学修成果と教育目標達成度評価」

講師・報告者：教育学部長福田亘博

概要：大学における最近の動向、特に教育の質保証の観点からの成績評価として、最近ルーブリックによる教育達成度評価に導入・利用されている（国内の大学の 63%で導入）との説明があり、ついで、ルーブリック評価の現状、メリット・デメリット、具体例などの説明及び忍ヶ丘教養Ⅳの授業で導入することの説明があつた。最後に今後教科や教育法の授業

でもそれぞれ具体例を紹介しながら、必要に応じて導入していくことが確認された。

## 2) 「学生の学力向上のための指導法：情報教育での工夫」

講師・報告者：教育学部教授日高英幸

概要：最初に、これまでのFD研修、学生の実態や各教科の目標と内容、他教科との関連等を踏まえ、ディプロマポリシー(DP)、カリキュラムポリシー(CP)のルーブリックを俯瞰する「確かな学力」向上のための指導法、工夫について報告した。情報教育での「情報を知識化する」という視点に関する具体的な事例を提示し、基本的な考えを述べ、考察し、学力向上のために「授業(=情報)内容の明確化」「到達目標(=ルーブリック)の明確化」の推進を提言した。また「情報を知識化するには体験・経験のプロセスが重要である」ことについて、ITシステムを活用した情報教育での工夫事例を提示し解説した。

その「情報(=授業)を知識化する」という視点のもと、「学力向上」には、学生自身が「自分の知識力を知る」「他者の知識力を知る」「集団の知識力を知る」ことを通して着実に知識を身に付け理解を深めていくことができるように「個人の課題取組」「グループ討議」「クラス全体討議」、そして最終的には自身が判断し、学習課題を解決できる授業の構築、展開が重要と事例に基づいて指摘した。

「知識・理解」を重視する授業では、学生の知識の定着状況や理解の仕方、程度には個人差があるため、既習事項に関する学生の状況を把握し、新たな知識の定着をどのように促すか、例えば具体的な課題を使って確かめたり様々な場面で活用したりすることを通して、学生が着実に知識を身に付け理解を深めていくことができるように授業を工夫する必要があるとの考えを情報教育での工夫事例により提言した。

## 【第3回FD研修会：9月30日(木)】

・参加者11名

### 1) 「平成26年度教育学部夏季合宿研修を振り返って」

講師・報告者：教育学部講師中原邦博

概要：今回、本学部で初めて実施した「特別対策合宿」について、報告と課題等が紹介された。まず、学生たちにとって今後の教員採用試験対策に本気で取り組む大きな転機になったという点で、大変意義のある行事であったと説明された後、学生たちが合宿後に書いた感想の要点を3点に整理され、説明された。

第1は、自分の知識の足りなさ、学習指導要領関係の勉強不足、個人面接に対する対策の必要性を痛感したなど、自分の課題が明確になったという点である。

第2は、宿泊研修で寝食を共にしながら、勉強も含めて様々な活動に同級生と一緒に取り組むことを通して連帯感、所属感を味わうことができた点である。

第3は、現職教員や教育関係者の経験豊かな講義・講話を聞いて、教師・保育士になるという目的意識を皆で高めることができた点である。

今回の経験・課題等を参考にしながら、次年度の合宿計画をさらに充実したものにしていきたいと締めくくられた。

## 2) 「1年前期「算数」で行ったアンケート結果から」

講師・報告者：教育学部助教渡邊耕二

概要：1年次前期に開講されている科目である「算数」の第1年目と第2年目の授業で行ったアンケート結果を分析し、学生の数学(算数)に対する意識と、それと学業成績(GPA)との関係性について報告した。使用した質問項目は、PISA2003における「興味・関心」、「道具的動機づけ」、「自己効力感」、「自己概念」、「不安のなさ」、「暗記方略」、「精緻化方略」、「制御方略」に関する合計40項目である。分析の結果、①「数学が好きか」という質問に対して「いいえ」と回答した学生は、不安のなさ、自己認識や制御方略が低い傾向にあること、②不安のなさ、自己認識や制御方略が高い傾向にある学生は、学業成績(GPA)が高い傾向にあること、③道具的動機づけは、必ずしも学業成績の向上に正の効果を持つとはいえない、などの特徴が報告された。これらの結果を考慮しながら、今後とも学生の学力向上に向けた指導を思索したい。

## 3) 「学生の学力向上を目指す教育実践 ―学生の主体的学習の一側面を支える保育教諭対策ゼミナールの実施について―」

講師・報告者：教育学部講師相戸晴子

概要：保育士資格や質の高い保育者が求められている現在、国家試験や採用試験を応援する教育実践の試みとしての教育実践「保育ゼミ」について報告された。保育ゼミは、原則毎週1回(水曜日の5限目)、1号館2Fの児童教育研究センターで開催され、学部、学年に関係なく誰でも受講することができる。活動内容は、情報交換、試験対策の勉強である。保育ゼミの最後は、各人が間違ったところや自信のないところをみんなで話し合い、共同学習による学び合いを大切にしている。

実施3ヶ月現在での成果としては、継続して参加している学生の学習習慣が少しずつ定着してきたことと模試等による成績が着実に向上していることである。自らの意思で参加

している学生への効果は大きいといえる。しかし、現在、参加していない学生たちを、いかに主体的に参加してもらうかという課題についても考えていきたい。

課題への改善策として、①参加したくなるような声掛けを行う、②参加しやすいゼミの雰囲気を作る、③ゼミに興味を持っていることだけでもほめる、④他人と点数等を比較しない、本人の学習前・学習後の伸びを認める、⑤学生一人ひとりのゼミへの関わり方を尊重する、などのかかわりを試みたいと締めくくられた。

#### 4) 「学生の学力向上を目指して—今後の方針—」

講師・報告者：教育学部長福田亘博

概要：平成 26 年度教育学部開設以来、学生の学業成績について、GPA やポートフォリオを利用して、指導・助言を行ってきているが、卒業時における教員採用試験合格を視野に入れた場合、現在までの GPA の推移や夏季合宿における模擬試験結果から、教科や教職科目に関する補習等が必要であるとの説明があった。国語及び算数については、すでに補習授業を実施しており、これらを参考に他教員でも担当している授業に関連した補習授業を立ち上げることに提案された。また、学生教職支援センターを中心に各県で実施されている教員採用試験から問題を抽出し、2～3 ヶ月に 1 回程度模擬試験を開始することも提案された。

#### 【第 4 回 FD 研修会：11 月 26 日（木）】

・参加者 11 人

1) 「学生の学力向上を目指して」：1) 平成 26 年度・27 年度入学生について、2) 授業評価におけるコメント、3) アクティブラーニング（グループ学習の課題）について

講師・報告者：教育学部長福田亘博

項目別に現状と課題について報告された。

1) に関連して、平成 26 年度入学生の 2 年生までの成績（GPA）の推移でみると、学年進行に伴って有意に高くなっており、教員採用試験合格を目指した場合、2 年次には GPA3.5 以上取得することを指導してきたが、半数を超える学生が取得していることが紹介された。

2) に関連して、幾つかの科目におけるコメントで「良かった点」と「悪かった点」として記載された内容の解説があり、学生のコメントについて、教員は真摯に対応して欲しいとの話があった。

3) に関連して、アクティブラーニングの技法としてグループ学習が採用されるが、ケー

スによっては学生の学力向上に大いに役立つが、一方でケースによっては難しい場合があることが事例を挙げて紹介された。

## 2) 「本学の学習管理システムを活用した e-ラーニングと学生指導・教育」

講師・報告者：教育学部教授日高英幸

平成 26 年度採択の文部科学省大学改革推進事業「大学教育再生加速プログラム (AP)」で構築された学内「学習管理システム」による学生の学力向上を目指す「本学の学習管理システムを活用した e ポートフォリオと学生指導・教育」への活用とその事例について紹介された。

最初に学内「学習管理システム」基盤について説明。そして e ポートフォリオ活動 (ゴール設定、ルーブリック提示、学習成果物作成 (エビデンス)・収集、自己・相互・教師評価) の中で学習者 (学生) 自身が学習プロセスを振り返ることで「学習への気づき」が生まれ、その過程で知識の獲得や学力の向上が期待できることを提示した。さらに、学習者一人ひとりの学習におけるパフォーマンスと学習プロセスに対する評価を実現し、学習過程におけるエビデンスに基づいた学習者一人ひとりへの具体的助言・指導を可能とし、その活用が教育課程での多様な教育を創出する可能性を提言した。

また、学内システムにタブレット PC (端末) を接続しての発展的な教育活用事例について紹介し、システムの有用な運用視点を提言した。具体的には、「忍ヶ丘教養Ⅳ」と「数学と生活」での活用事例を報告した。まず、本学の Moodle へのアクセス方法を確認し、ファイルのアップや受講生を確認するなどの方法を紹介した。Moodle では、ウェブサイトのアドレスや作成した動画の共有も容易に行えることから、学生とのコミュニケーションを高めるツールとして有用である。今後は、有効なツールとして更なる用途を考え、実践成果を報告した。

### 【第 5 回 FD 研修会：12 月 24 日 (木)】

・参加者 9 人

#### 1) 「教育学部の授業支援のための Mahara の利用について」

講師・報告者：株式会社ロボックス 児玉秋二

概要：本学は教員と学生間で種々の教育情報について Google drive や Moodle を用いて双方向でやり取りをしているが、これらの管理システムについて本学として平成 27 年度導入した Mahara (学生の学修管理システム) に移行することが決定している。そのため、Mahara システムを大学に設定した株式会社ロボックス児玉秋二氏を招き、教育学部教員を

対象に Mahara の使用方法、メリット・デメリット等の説明を受けた。なお、これらについて TabletPC を用いて教員が実際に試した。学部として、利用した方が良い教員は利用する方向で検討することになった。

## 2) 「宮崎大学におけるアクティブラーニングに対する教員と学生の意見交換会」

講師・報告者：教育学部准教授守川美輪

宮崎大学 FD 研究会における標記の意見交換会の報告である。アクティブラーニングに対する教員と学生の意見発表が行われた。アクティブラーニングに関するアンケートでは、大学側のアクティブラーニングに対する思い入れとは異なり、学生はそれほど意識・理解している訳ではないことが報告され、またグループ学習における成績評価が主体となった学生からみると、グループ内で同じ評価になっており、公平でないとの指摘があった。また、グループ学習の人数が増えるについて来れない学生がでたり、また低学年における発表は自分の担当分は理解できたが、他人の発表は良く理解できないなどの問題があった。この場合教員の追加説明があると良く理解できたなどのコメントがあった。学生によって基礎知識が異なると詳しい学生に任せてしまう傾向にあり、やる気のない学生ばかりを集めたグループがあっても良いのではないかとの発言があった。

以上、学生による意見から、アクティブラーニングはある程度受け入れられているが、方法や成績評価にはまだ検討が必要であると結論された。

### 【第 6 回 FD 研修会：平成 28 年 2 月 18 日（木）】

参加者：9 人+5 人（オブザーバー）

#### 1) 「電子ポートフォリオ（e-Portfolio）使用方法：何が出来る？どうすればいい？」

報告者・講師：国際教養学部准教授 パッソス・アンデルソン、教育学部講師

マレー・アダム

まず、本学の電子ポートフォリオは、Moodle と Mahara の 2 つのシステムで構成されている。Moodle 上では、学生は各自のレポートなどを提出し、教員はその評価などを行う。Mahara 上では、学生はレポートなど各自の学修成果を蓄積し、学内外においてそれらをシェアするなどが可能である。

本学の電子ポートフォリオシステムの活用事例として、ルーブリック、ジャーナル（日誌）、バッジ、タブレット PC を取り上げ報告した。①ルーブリックによって評価基準を示すことで、学生は求められる到達レベルを明確に認識できる。国際教養学部におけるルーブリック

を用いた評価システムと活用事例を紹介した。②英語でジャーナル（日誌）を作成し、ライティングやコミュニケーション・スキルの向上および自己評価を促す。この際には、ルーブリックと関係づけると効果的と考えられる。③バッジによって、身に付けたスキルや成果のレベルを明示的に評価できる。④タブレット PC 上で Kahoot と呼ばれるゲーム型の授業支援システムを活用し、授業の振り返りを効率よく行う。上記 4 つを事例として電子ポートフォリオについて説明した。

### 【第 7 回 FD 研修会：平成 28 年 2 月 24 日（水）】

・参加者：22 人

#### 1) 宮崎国際大学教育学部における組織的な FD 活動について

宮崎学園（宮崎国際大学・宮崎学園短期大学・宮崎学園中等・高等学校・宮崎学園みどり幼稚園）合同 FD/SD 研修会において

講師：教育学部長 福田亘博

概要：本 FD/SD 研修会は、宮崎学園（宮崎国際大学・宮崎学園短期大学・宮崎学園中等・高等学校・宮崎学園みどり幼稚園）合同で実施している研修会である。9 分科会に分かれて、「全生徒・学生の学力向上」を目指して毎年開催されている。平成 27 年度宮崎学園 FD・SD 合同研修会（第 2 回）において、教育学部における組織的な FD 活動について報告した。

平成 17 年 1 月の中央教育審議会答申では、学部等における教育力向上のための必要な措置を講じるとともに、その教育の質を保証する上で備えるべき基準をより明確にすることが求められた。また、平成 19 年 7 月の大学設置基準の一部改訂により、教育改善のための組織的な研修等を行うことが法律的に義務化されている。

教育学部では、ディプロマポリシーの修得に向けて、PDCA サイクルによる授業改善を行っている。具体的には、シラバスの再点検・充実・改善、学生による授業評価アンケート、新任教員に対する研修会、FD 講演会や FD 研修会などである。これらの FD 活動は、報告書にまとめられ大学 HP で公開し、周知を図っていることを報告した。

### 【第 8 回 FD 研修会：平成 28 年 3 月 18 日（金）】

・参加者：9 人

#### 1) 「忍ヶ丘教養 I・II」の学生による授業評価における現状と課題について

教育学部助教 渡邊耕二

概要：平成 26 年度、平成 27 年度開講された忍ヶ丘教養Ⅰ・Ⅱの授業評価結果から、次年度に向けた忍ヶ丘教養Ⅰ・Ⅱの課題について報告した。2014 年度と 2015 年度ともに高い評価を得たが、忍ヶ丘教養Ⅱにおいては、本授業の主旨・目的をより詳細に伝える必要があることが明確になった。なお、忍ヶ丘教養Ⅲ・Ⅳでは、地域・国際社会における教育の理解や各自が設定するテーマについて情報収集および発表を行うことになっており、この科目とのつながりを持たせる必要があることも明確になった。次年度以降の忍ヶ丘教養Ⅰ・Ⅱではこれらの課題を学生に説明し、教育効果を高めたいと締めくくられた。

## 2) 「忍ヶ丘教養Ⅲ」および「忍ヶ丘教養Ⅳ」実施における現状と課題について」

教育学部准教授 守川美輪

概要：1) 「忍ヶ丘教養Ⅲ」は地域・国際社会における教育の理解と教育者としてのキャリア形成に関わる授業であり、ある程度の成果をあげている。来年度の実施予定と来年度の担当者を確認し、次の点を改善することとした。講師から課題が出されなかった場合は、学生は感想を記入して提出する。試験については、担当教員が講義を聞いて問題を作成し、学生は問題を選択して回答する。採点は担当教員が行う。

2) 「忍ヶ丘教養Ⅳ」は学生がこれまでに「忍ヶ丘教養Ⅰ～Ⅲ」で学んだ内容について、自分で興味ある課題を選び、必要な資料・情報を収集・整理・解析し、発表をする。学生はこの取り組みによって、課題設定や情報収集、要旨作成やプレゼンテーションの能力を向上させている。来年度の担当者を確認し、次の点を改善することとした。

①担当教員の決め方について各教員から担当できそうなキーワードを聞き取り、一覧表にして学生に示す。学生の担当を決める際には、配当案を作成した後、教育学部教員で話し合いをして決定する。課題設定について「忍ヶ丘教養Ⅰ～Ⅲ」で学んだことを深めるのが基本だが、論理的に考察できるならば、そこから離れてもよいことを学生に説明する。要旨提出の際には、グーグルフォルダ等を使う。発表の時間は短くすると十分な発表ができないので 8 分間～10 分間とする。発表会については時間が設定できれば 2 会場で連続する 2 日間とする。

②評価については、採点は評価の基準に沿って行う。評価項目についての変更は案を作成し、教育学部教員で話し合いをして決定する。発表に対する優秀賞の授与を行うことにした（2 会場の場合は 2 名）。